

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20320122

研究課題名(和文) 古墳時代政権交替論の考古学的再検討

研究課題名(英文) Archaeological Re-Examination of a Hypothesis on the Replacement of Political Authorities in Kofun Period Japan

研究代表者

福永 伸哉 (FUKUNAGA SHINYA)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：50189958

研究成果の概要(和文)：

本研究では、おもに1990年代以降の新たな考古資料の分析と効果的なフィールドワークを結合させることによって、古墳時代政治史を考古学的に考察した。その結果、弥生終末期から古墳後期まで、中央性を持つ政治権力が畿内地域に一貫して存在したが、その内部では主導権の数度の移動が認められ、これが「政権交替」と呼ぶべき政治変動であったという理解に到達した。そして、この政治変動の背景には、大和盆地と河内平野に基盤を置く2つの地域集団の対抗関係が存在したのではないかという仮説を提示した。

研究成果の概要(英文)：

This study archaeologically approaches to the political history of Kofun Period Japan by integrating the results of analyses of artifacts mainly discovered since the 1990's and of effective fieldwork. As a result of this study, we have reached the following conclusion: While the political authority with the nature of central dominance had always existed in the Kinai region from the end of the Yayoi Period (early third century A. D.) to the Late Kofun Period (early seventh century), the political leadership shifted several times within the central authority. We have hypothesized that a background to the shifts was a competitive relationship between polities based in the Yamato basin and in the Kawachi plain.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2010年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
年度			
総計	11,400,000	3,420,000	14,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：古墳時代、政権交替論、首長系譜、猪名川流域、長尾山古墳

1. 研究開始当初の背景

古墳時代政治史については、記紀の歴史認識の強要から解放された第二次大戦後間もなくして、その根幹にかかわる重要な二つの

仮説が提起された。江上波夫氏の「騎馬民族征服王朝説」(江上ほか1949「日本民族—文化の源流と日本国家の形成」対談録『民族学研究』第13巻3号)、水野祐氏の「王朝交替

説」(水野 1954『増訂日本古代王朝史論序説』小宮山書店)であった。これらは、敗戦以前の「万世一系」史観に対する強烈なアンチテーゼとして大きな反響を呼んだが、考古学の資料や分析方法がなお不十分な段階にあっては、素朴な考古学的事象や『記紀』の不十分な情報に主要な論拠を置かざるをえないという制約もまた避けがたいものであった。

その後、古墳構造・築造時期・副葬品の性格などにかんする考古学研究法が進歩する中で、はやくも 1960 年代初めには、近藤義郎らによる岡山県月の輪古墳の調査研究の中で、地域内の古墳築造動向に着目して首長系譜を認識・解明し、その推移から古墳時代史を通時的に復元する手法が開拓された(近藤編 1960『月の輪古墳』同刊行会)。60 年代後半から 70 年代にかけては畿内の大王墳や地方の首長墳などの変化から、王権内部の政治変動や王権と地方首長の力関係を読みとろうとする先駆的な研究が現れた(白石太一郎 1969「畿内における大型古墳群の動向」『考古学研究』第 16 巻第 1 号、小野山節 1970「5 世紀における古墳の規制」『考古学研究』第 16 巻第 3 号、甘粕健 1970「武蔵国造の反乱」『古代の日本』7 角川書店)。80 年代には、都出比呂志氏が京都府乙訓地域の古墳の良質なケーススタディを基礎に、中央と地方の首長系譜にみられる継続と断絶のパターンが連動していることを指摘し、5 世紀前葉、5 世紀後葉、6 世紀前葉の 3 回にわたって地方を巻き込むような列島規模での政治変動が生じたという見通しを示した(都出 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇第 22 号 大阪大学)。

80 年代頃までは、示唆に富む文献史料を用いた研究に対して、考古資料からのアプローチはなお資料や研究状況の点で発展途上という感が強かった。しかし、その後 1990～2000 年代にかけて、古墳時代にかかわる新出資料の増大と個別研究の進展によって本テーマを取りまく学問的状況は大きく変化している。具体的には、古墳調査事例の増加、韓国における三国時代遺跡調査の進展、副葬品の編年や系統にかんする研究の進展、前方後円墳成立過程にかんする資料の増加、などである。考古学的方法による多方面からの検討を重ね合わせてより蓋然性の高い像を結ばせることが、以前にもまして可能になりつつある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、古墳時代研究における重要な論点の一つとなってきた「政権交替論」について、おもに 1990 年代以降の新出資料の分析と効果的なフィールドワークを結合させることによって全面的な再検討を行い、政治変動期に焦点をあてた最新の古墳時代

政治史を提示することである。さらに、そうした特徴が認められる古墳時代を国家形成論上からいかにとらえるかという理論研究や、東アジアや欧米の国家形成期との比較研究についても展望を示し、次なるプロジェクトとして構想している「墳墓と社会関係の国際比較研究」への有効な布石とすることも、副次的ではあるが本研究の展望の一つである。

3. 研究の方法

研究遂行にあたっては、以下 5 つの具体的な研究テーマを設定した。

- ①墳墓要素の分析による古墳時代政治変動期の抽出
- ②地域首長系譜にかんする良好なケーススタディの提示
- ③古市古墳群成立過程の復元
- ④政治変動期の国際的背景の解明
- ⑤海外の比較可能な事例の把握

そして、具体的な作業は、研究代表者・分担者がそれぞれ役割を分担して行うテーマ研究、発掘調査や内外の墳墓遺跡の現地踏査などのフィールド調査、それぞれの成果について討論する研究集会という 3 つの柱を立てて行った。

テーマ研究は、上述した①～⑤にそくして、①を福永、②を寺前、③を高橋、伊藤(研究協力者)がおもに担当し、④⑤は海外の研究協力者を含めた全員で討論した。

フィールド調査は、テーマ②については兵庫県南東部～大阪府北西部の「猪名川流域」の地域首長系譜分析を計画し、具体的には宝塚市長尾山古墳の 3 年間にわたる発掘調査、同万籟山古墳の現地踏査と採集埴輪の整理分析を行った。テーマ③に関連しては富田林市真名井古墳出土埴輪の整理分析を行った。テーマ④⑤についても海外の墳墓遺跡の踏査と研究現状の把握を行った。なお、長尾山古墳の発掘調査の様子は毎日インターネットで発信するとともに、地元教育委員会と合同で市民向けの現地説明会や歴史講座を開催するなどして、研究成果を社会的に活用する取り組みも積極的に行った。

研究集会は、H20 年度 5 回、H21 年度 4 回、H22 年度 3 回をそれぞれ実施した。このうち、H20 年度には韓国、H21 年度にはフランス、韓国、H22 年度にはイギリスの研究者を招き、日本の古墳時代史や海外事例との比較研究などについて、討論する機会を持った。また、研究集会では研究組織メンバーだけでなく大学院生、学部生の報告も行い、本プロジェクトを教育機会としても活用できるようにした。

4. 研究成果

研究成果は、そのつど論文・図書・口頭発

表などで公表してきたが、総括的な内容はH23年3月に冊子体で刊行した『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』に記載されている。

(1) テーマ研究

テーマ研究の成果については上述の冊子体報告書に6本の論考として公表した。

福永論文「古墳時代政権交替と畿内の地域関係」は、弥生終末期から古墳後期まで、中央性を持つ政治権力が畿内地域に一貫して存在したが、その内部では主導権の数度の移動が認められ、これが古墳時代政権交替と呼ぶべき政治変動の実態であったことを、考古学の情報を用いて論述した。そして、大和盆地と河内平野という2つの地域集団の対抗関係が古墳時代政治史の底流に存在したのではないかという仮説を提示した。

寺前論文「猪名川流域における前期古墳の動向」では、本科研の中心的なフィールド調査として実施した宝塚市長尾山古墳の調査成果を近隣の前期諸古墳と比較して検討し、猪名川流域では古墳時代前Ⅱ期から前Ⅲ期初めまでに首長墳が出現する小地域と、前Ⅲ期から前Ⅳ期に遅れて現れる小地域があり、中期に優勢となるのは後者の地域であるという指摘を行った。このことは、猪名川流域内の地域盟主権の流動化が前期後半には始まった可能性を指摘するもので、興味深い分析といえよう。

清家論文「首長系譜変動の諸面期と南四国の古墳」は、高知県域を中心とする古墳の動向を通時的に整理し、前期後半に西部の幡多地域で首長墳が登場するが、中期前葉には築造が途絶え、新たに高知平野で古墳築造が始まること、後期後半～終末期にかけて高知平野には伏原大塚古墳、小蓮古墳、朝倉古墳という盟主的首長墳が小地域を移動しながら継起的に築造されることを指摘した。そうした推移の諸局面には、地域内の事情、瀬戸内地域からの影響関係、畿内地域からの直接、間接の影響といった異なる要因が存在するという見通しを示し、地域古墳分析の複眼的思考の重要性を提起した。

高橋論文「古墳時代政権交替論をめぐる二、三の論点—河内政権論を中心に—」は、この問題に取り組んできた文献史研究者の研究展開やそれぞれの所論の特徴を詳細に検討し、考古学的アプローチともかかわる墳墓や宮の扱いなども含めて、文献史、考古学双方の議論の不確かな点や分析を集中すべき点を提言した。さらに、河内政権論とかかわる時期については、応神以降の王権基盤の所在地、王統の断絶の有無、応神前後での王権や政権構造の変化の有無の検討が重要であるとの認識に立って、自身の理解を提示している。

伊藤論文「古市古墳群の形成と居住域の展

開」は、地元で長年にわたって文化財調査にかかわってきた強みを生かして、域内の集落遺跡の動向を悉皆的に整理分析した労作である。その結果、古市古墳群域内では、現時点での調査状況によると大半が堅穴住居からなる小規模な集落遺跡であり、集団の居住という点では貧弱な様相を呈するいっぽうで、北接する大和川下流域には、かなりの居住人口が推定され、とくに大阪市長原遺跡のように古市古墳群の盛衰と集落の盛衰が同一歩調をとるような大集落が存在することを指摘し、後者の大和川下流域集団を古市古墳群造営基盤と考えれば合理的であるという見通しを示した。

金澤論文「富田林市真名井古墳出土埴輪の特徴と編年的位置」は、1961年に宅地開発をきっかけに緊急的な調査が行われた真名井古墳出土資料のうち、これまで十分実態の知られていなかった円筒埴輪類についてはじめて本格的な分析を行ったものである。形態、整形技法、透孔などの特徴を検討し、柏原市玉手山9号墳とほぼ同時期のものと位置づけ、古墳の年代を前期前半(2期)におく見解を示した。中・南河内の前方後円墳出現時期を円筒埴輪から位置づけた作業は、古市古墳群前夜の当地域の有力者の動向を考察する上で重要な成果を提供したといえよう。

以上に概述したテーマ研究の成果は、必ずしもすべてが一つの整合的な像を結ぶとはいえないが、古墳時代350年間の間にも、地域内で、また地域間でさまざまな考古資料上の変動期があることを示している。前方後円墳という同形の首長墳が継続して造られているから中央政治権力の所在や政権構造に大きな変化はなかったというような、ややもすれば単純化の過ぎるとらえ方は、資料的にはすぐわなくなりつつあることを明確にした。

(2) フィールド調査

本研究の第2の柱であったフィールド調査においては、宝塚市長尾山古墳の発掘調査を実施し、調査前には前期末の前方後方墳と考えられていたこの古墳が、前期前半の前方後円墳であるという新たな位置づけを得た。これにより、猪名川流域の前期末以前と前期末以降では盟主的首長墳のあり方にきわめて大きな変化が生じていたことが明らかになり、2004年まで大阪大学考古学研究室と川西市教育委員会が共同で行った6世紀前葉の川西市勝福寺古墳の調査成果を加えれば、猪名川流域の前期から後期までの首長系譜の変動がほぼ通時的にとらえられるようになった。古墳時代政権交替論は、畿内と各地域の双方の古墳動向を総合的に検討することが有効であり、猪名川流域はそうした検討に耐える事例として今後取り扱えることになろう。さらに、あわせて行った宝塚市万籟

山古墳の採集埴輪の整理分析も、猪名川流域の事例研究に重要な情報を提供したといえる。

このほか、国内外の墳墓遺跡の踏査も行った。韓国では、三国時代の百濟、加耶の墳墓遺跡を踏査し、有力墳墓の存否と地域勢力の盛衰が対応する事例が多いことを確認した。その動きの一部は列島の古墳時代政治史と連動する可能性もあり、今後の日韓共同研究の進展が期待される。たほう、ブリテン島の墳墓遺跡踏査では、墳墓築造と社会の複雑化を関連づける研究は活発であるが、墳墓要素から地域間の政治関係を考古学的に復元するアプローチは、必ずしも主要な研究関心とはなっていないように思われた。遺物や遺構の型式学より、社会構造の分析に重点がおかれる研究風土の違いであろうか。その意味では、古墳時代研究の成果を英語で世界に広く発信する研究を進めることが、国際的には意味のあることと考えられ、今後のわれわれのプロジェクト策定に活かしてゆくべき課題と認識した。

(3) 研究集会

研究集会は、3年間で12回開催した。このうち、2009年2月に禹在柄氏（忠南大学校考古学科）「韓国忠南地域の近年の発掘調査について」、2009年8月にロラン・ネスブルス氏（フランス国立東洋言語文明学院）「ヨーロッパの国家形成期の遺跡調査と理論研究」、2010年2月に朴天秀氏（慶北大学校考古人類学科）「新羅と倭—古代韓日交渉史研究の新たな展望—」、2010年7月にジナ・バーンズ氏（ロンドン大学）“What happened after the demise of the Early Kofun ritual system?”という内容の海外招聘報告の機会を設け、国際的視点から日本古墳時代史研究にも関連する報告と関連討論を行った。国際的な比較研究への展望を得ることも、副次的ではあるが本研究プロジェクトのねらいであった。この点は期間内に総括的な成果を得るまでには至らなかったが、研究集会で意見交換を行う中で、古墳時代研究の国際化が今後有効かつ必要な研究分野であることを認識できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計19件)

- ①福永伸哉2011「古墳時代政權交替と畿内の地域関係」『古墳時代政權交替論の考古学的再検討』大阪大学文学研究科、5-18頁、査読無
- ②高橋照彦2011「古墳時代政權交替論をめぐる二、三の論点—河内政權論を中心に—」『古墳時代政權交替論の考古学的再検討』大阪大

学文学研究科、43-62頁、査読無

③寺前直人2011「猪名川流域における前期古墳の動向」『古墳時代政權交替論の考古学的再検討』大阪大学文学研究科、19-28頁、査読無

④清家章2011「首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳」『古墳時代政權交替論の考古学的再検討』大阪大学文学研究科、29-42頁、査読無

⑤伊藤聖浩2011「古市古墳群の形成と居住域の展開」『古墳時代政權交替論の考古学的再検討』大阪大学文学研究科、63-86頁、査読無

⑥金澤雄太2011「富田林市真名井古墳出土埴輪の特徴と編年的位置」『古墳時代政權交替論の考古学的再検討』大阪大学文学研究科、87-100頁、査読無

⑦福永伸哉2010「同範鏡論・伝世鏡論の今日的意義について」『待兼山考古学論集II』大阪大学考古学研究室、327-340頁、査読無

⑧清家章2010「古墳時代集団墓における木棺と石棺」『待兼山考古学論集II』大阪大学考古学研究室、293-304頁、査読無

⑨清家章2010「古墳における棺と棺材の選択」『日本考古学協会2010年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会2010年度兵庫大会実行委員会、359-364頁、査読有

⑩清家章2009「古墳時代における父系化の過程」『考古学研究』第56巻第3号、55-70頁、査読有

⑪福永伸哉2008「大阪平野における3世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』第42号 史学篇 大阪大学文学研究科、1-26頁、査読無

⑫高橋照彦2008「終末期古墳と薄葬令—変化する埋葬の文化と律令国家形成への道程」『大化改新と古代国家誕生』新人物往来社、170-175頁、査読無

[学会発表] (計7件)

①清家章「土佐における後期・終末期古墳の立地と選地」(第12回高知考古学研究会)、2011.1.22、高知県文化財団埋蔵文化財センター

②福永伸哉「銅鏡の政治利用と古墳出現」(日本考古学協会2010年度大会)、2010.10.17、播磨町中央公民館大ホール、兵庫県

③ Shinya Fukunaga, “Significance of ‘Triangular-Rimmed Mirrors’ in State Formation in Japan” Harvard East Asian Archaeology Seminar, 2009.11.2, Harvard University, U.S.A.

④高橋照彦「考古資料からみた律令社会の成立過程とその変容—「大化薄葬令」の再検討を中心に—」(日本史研究会2008年度大会)、2008.10.11、花園大学、京都府

⑤福永伸哉「3世紀摂河泉の首長墓の動態」(二上山博物館シンポジウム「邪馬台国時代

の撰河泉と大和」)、2008.7.21、香芝市二上山博物館、奈良県

〔図書〕(計8件)

- ①福永伸哉(編)2011『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室、全44頁
- ②福永伸哉(編)2010『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科、全57頁
- ③寺前直人2010『武器と弥生社会』大阪大学出版会、全345頁
- ④清家章2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会、全297頁
- ⑤福永伸哉(編)2008『長尾山古墳第1次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室、全34頁
- ⑥福永伸哉(編)2009『長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室、全26頁

〔その他〕

ホームページ等

http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/hpna_gaoyama2010/index2010.htm

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福永 伸哉 (FUKUNAGA SHINYA)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：50189958

(2) 研究分担者

高橋 照彦 (TAKAHASHI TERUHIKO)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：10249906

寺前 直人 (TERAMAE NAOTO)
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号：50372602

清家 章 (SEIKE AKIRA)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：40303995

(3) 研究協力者

都出比呂志 (TSUDE HIROSHI)
大阪大学・名誉教授
研究者番号：90025065

伊藤聖浩 (ITOU MASAHORO)
羽曳野市教育委員会・教育総務課

禹在柄 (WOO JAE PYONG)

韓国忠南大学校・人文大学・教授

朴天秀 (PARK CHEUN SOO)
韓国慶北大学校・人文大学・教授

ロラン・ネスプルス (Laurent Nespoulous)
フランス東洋言語文明学院・准教授